

## はてしない雑穀の物語

木俣美樹男 雑穀街道普及会

Never Ending Story of Millets

Mikio Kimata, Japan *Hirse Straße* Promotion Band

バスチアン・バルタザール・ブックスが『はてしない物語』(M. エンデ 1979) を読み継ぐように、雑穀の栽培と調理のフィールド調査をしてきた。また、洗礼名フランソワ・パチストを忘れ去られたチト少年が『みどりのゆび』(M. ドリュオン 1957) で草花を育てるように、雑穀の植物学的特性の実験研究をしてきた。雑穀の起源と伝播の研究のためユーラシア大陸各地で国際共同フィールド調査、インド、イギリスほかで在外研究などに、50年ほど従事した成果は『日本雑穀のむら』(2022)、『第四紀植物』(2022)、『環境学習原論』(2021)としてまとめた。現在は、『雑穀の民族植物学—インド亜大陸の農山村から』を書いている。

東京学芸大学と特定非営利活動法人自然文化誌研究会は50年ほど関東山地南部地域の農山村においてエコミュージアム日本村づくりを続けてきた(H. リヴィエール 1973)。植物と人々の博物館はそのコア・博物館、ビジターセンターであり、国内外から収集した雑穀のさく葉標本、民具、調査報告書・書籍など関連資料を収集、収蔵し、閲覧や展示を行うとともに、雑穀栽培講習会を地域の篤農の指導を得て行ってきた。2011年の東日本大震災後に、東京でも放射性物質が降下し、計画停電が行われ、東京学芸大学の雑穀種子貯蔵庫は停止したので、急遽、イギリスの王立植物園のミレニアム・シード・バンクに約1万系統を緊急避難、移管した。雑穀研究会などのシンポジウムや学習会も何度かこの雑穀街道地域で開催した。現在、雑穀は縄文時代以降の伝統的畑作農耕の象徴であると考えて、豆、芋、野菜などの在来作物品種とともに、継保存存するために雑穀街道をFAO世界農業遺産に登録するように、2014年から準備活動をしている。

雑穀街道 *Hirse Straße* はドイツのロマンティック街道などから着想を得たエコスタディ・ツーリズムである。東京都水源林がある山梨県丹波山村から、ヤマメの養殖に始めて成功した小菅村、穀菜食による健康長寿(古守豊甫)で世界的に知られた上野原市桐原、トランジション・タウンを定着させている相模原市緑区藤野までを、雑穀街道と呼ぶことにした。この地域は旧石器時代からの遺跡があり、特に縄文時代中期の遺跡が多い。この時期を代表する勝坂式土器の遺跡は相模原市南区にあり、雑穀街道は勝坂式土器の文化圏にある。これらの土器からはダイズやアズキの野生種から時を経て次第に種子粒を大きくしている考古学的証拠が出ている。ヒエやエゴマに続いて、ダイズなども日本で栽培化過程を有したと考えられるようになってきた。

世界農業センサス(1950)では、この農山村地域は全国的に見ても、非常に多様な雑穀・芋・豆・野菜が栽培されていた。現在でも、90歳前後の古老数名が多くの雑穀種と在来品種を保存、栽培している。また、若い移住・新規就農者らのやまはた農園、宮本茶園など、地域住民のお百姓くらぶ(ローカル・シード・バンク)やチーム五右エ門、環境を考える相模原の会、自給農耕ゼミ(佐野川、小金井)、芽ぐみれっとなどのグループも雑穀栽培を継承している。上野原市ではキヌアを栽培奨励し、相模原市では津久井在来ダイズを継承、普及している。シュタイナー学園やパーマカルチャー・センター・ジャパンも藤野地区にある。

雑穀街道普及会では雑穀栽培伝承農家とともに、あらたな栽培者を増やすために、1) 雑穀栽培講習会、種子の配布、雑穀の加工・調理や商品開発、ローカル・シード・バンク創りなどを行ってきた。2023年は国際雑穀年であるので、これを機会に一層、世界農業遺産の申請のための準備活動を促進したい。雑穀と焼畑関連の世界農業遺産はすでに、高千穂郷・椎葉村の山間地農林業複合システム、およびにし阿波の傾斜地農耕システムが登録されているので、これらの地域とも連携するように、本州でも関東山地の雑穀街道を「食物、健康および環境学習を統合する山村農耕文化複合（仮）」として登録申請したい。

私は1997年に、全インド雑穀改良計画コーディネーターのシタラム博士と連名で国際雑穀フォーラムを創るよう提案し、2010年には生物多様性条約締約国会議COP10においてCBD市民ネットワークの人々とたねの未来作業部会として在来品種の種子の保存に関する提言を行い、名古屋市に向陽高校と南山大学附属女子中・高校の協力も得て、雑穀など由来品種の展示ブースで普及啓発活動を行った。シタラム博士は長年の共同研究者であったので、1988年に雑穀街道地域に訪訪している。新年5日に、シタラム博士から年賀メールを頂いた。日本の研究者との共同研究によって雑穀を世界レベルで見ることができたとお褒め頂いた。「2023年は雑穀愛好者や研究者にとって特別な歳である。インド政府はほとんど毎日、すべての研究所、国立農科大学、雑穀普及企業、市民団体など全国のあらゆる場所で、実際的な参加を得て何らかのプログラムを計画している。全国が雑穀について非常に熱中している。首相は全国活動でリーダーシップを発揮している。農民生産組合は、農民が育てた雑穀を有利な市場売買のために、雑穀の価値とつながる生産者は企業と最終利用者をつなげ、雑穀の加工と付加価値に関する100以上の新しい起業が2022年の間にインドで起こってきている。」

国連は、2016年から2025年までを「栄養のための行動の10年」と宣言し、その間に、2016年の『国際マメ年』、2018年の『小農権利宣言』や2021年の『国際果実野菜年』などを制定して、世界で飢餓をなくし、栄養不良を根絶する行動を活性化させ、より健康で持続可能な食事にアクセスできるよう取り組んでいる。また、2019年から2028年までは『家族農業の10年』でもあるので、インド政府提案で2023年を国際雑穀年とし、栄養、農業、気候の課題に対応するための雑穀の役割を認識し、雑穀の気候耐性と栄養面での利点に対する認識を高め、雑穀の持続可能な生産と消費の増加を通じて、多様でバランスのとれた健康な食生活を提唱するとしている。

雑穀街道をFAO世界農業遺産に申請する準備活動の賛同・後援団体は、雑穀街道普及会、特定非営利活動法人自然文化誌研究会／植物と人々の博物館、特定非営利活動法人トランジション・ジャパン、家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン（FFPJ）、一般社団法人ジャパニーズビーガンつぶつぶ（JVATT）、小菅村漁業組合、北都留森林組合、雑穀研究会、一般社団法人日本雑穀協会ほか、賛同する個人も増えてきている。雑穀に関する資料や雑穀街道普及会の活動は下記サイト「雑穀街道普及会」でYou Tube動画も含めて閲覧できるので参照していただきたい。なお、詳細は2023年1月20日に家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン学習会、2月23日に国際雑穀年記念つぶつぶパワー連続学習会でお話する。

[www.milletimplic.net/milletworld/millstr.html](http://www.milletimplic.net/milletworld/millstr.html)

地球史の大きな変曲時点である第四紀人新世初期において、多様な雑穀種は世界各地で栽培されており、その多くは夏生一年生の自殖性、C<sub>4</sub>植物であり、気候変動に対して耐性、回復力が高く、これまでの歴史的な人為災害の際にも、飢饉から多くの人々を救ってきた。

若い人々にはみどりのゆびをもって、雑穀、豆類、芋類、野菜類などの在来品種を小規模自給農耕、家庭菜園、エディブル・ウェイ、プランターでも栽培、おいしく調理、健康的に素のままの美しい暮らし sobibo を楽しく学習しながら、アフリカなどから極東日本にまで伝播した雑穀などの伝統的な生業知識や農耕文化複合を継承するという『はてしない物語』を続けてくださるように希望したい。